

「Twitter」のカタカナ表記は「トゥイッター」か「ツイッター」か

— 外来語受容における「原音主義」と「慣用主義」の相克 —

How is "Twitter" rendered in katakana?

: When Japanese speakers make loanwords, which do they make much of the original pronunciation and of Japanese pronunciation?

岡 田 祥 平

Shohei OKADA

1. はじめに

Twitter（以下、鍵括弧なしでTwitterと表記する場合は、Twitterのサービスのことを意味する。一方、鍵括弧付きで「Twitter」と表記する場合は、「Twitter」というローマ字表記そのもの、あるいは日本語に取り入れられる前の英単語のことを指す）とは、「自分がいま何をしているか」という「つぶやき（ツイート）」を140文字以内という短い言葉で書きこむことで、メッセージを気軽に交換し交流しあえるサービス（大月宇美2014）のことである。当該サービスの正式名称（当該サービスを提供しているTwitter社が当該サービスに言及する際の名称）は、現代日本語においても「Twitter」とアルファベットで表記することになっているようである¹⁾。しかし、現代日本語の様々な言語資料（新聞・雑誌記事、書籍、インターネット上の文書など）を見ると、当該サービスのことをカタカナで表記している場合が非常に多いことに気づく。

このことに関連して、岡田祥平（2014）では、『現代用語の基礎知識』（自由国民新社）²⁾にTwitterがいつから言及されているかについて調べた結果を報告している。その結果をまとめると、以下の表1（岡田2014の付表に、2014年版の情報を追加したもの³⁾）のようになる。

表1からは、以下のような事実を読み取ることができる。

(1)①上述のとおり、Twitterは、正式にはアルファベットで「Twitter」で表記することになっているが、『現代用語の基礎知識』では、カタカナ表記がまず提示され、その後に、括弧内にアルファベット表記が併記される場合が多い。このことは、現代日本語の書記言語において、Twitterを言及する際には、アルファベット表記よりもカタカナ表記が採用される可能性が高いということを示唆していると考えられる。

②2008年版、2009年版の記述を見ると、カタカナ表記にゆれ（「ツイッター」と「トゥイッター」）が認められる。

筆者にとっては、以下に述べる外国語の日本語化という観点から、特に(1)の②が非常に興味深い事実に見える。

Twitterはアメリカから日本に流入したサービスであり、「Twitter」という単語も英語（米語）から日本語に流入した外来語⁴⁾である。外来語が日本語に取り入れられる際には、既に、幾つもの先行研究で、「日本語に移入された外国語、すなわち外来語は、日本語の音韻体系の許容範囲内で発音されることが普通」、

表1 『現代用語の基礎知識』におけるTwitterおよび関連用語の掲載状況

| | 「外来語・カタカナ語」の章 (2009年版・2010年版) 「外来語」の章 (2011年版～) ※いずれも、堀内克明氏、大森良子氏執筆 ※※巻末のコナナーで、数行程度の簡単な解説があるのみ | 「インターネット」の章 ※大月宇美氏執筆 | 「メディアと社会」の章 ※水越伸氏執筆 | その他の章 |
|------------------|---|------------------------------|--|---|
| 2008年版 | ○「ツイッター[twitter]」が立項。 | ○「Twitter (トゥイッター)」が立項。 | | |
| 2009年版 | ○「ツイッター[twitter]」が立項。 | ○「Twitter (トゥイッター)」が立項。 | | |
| 2010年版 | ○「ツイッター[Twitter]」が立項。 | ○「Twitter (ツイッター／ついったー)」が立項。 | ○「ツイッター[twitter]」が立項。 | ○「流行現象」の章 (もり・ひろし氏執筆) にて「ツイッター[Twitter]」が立項。 |
| 2011年版 | ○「ツイッター[Twitter]」が立項。 | ○「Twitter (ツイッター)」が立項。 | ○「ツイッター[twitter]」が立項。 (・「この分野を読む」の欄の本文中にて「ツイッター」に言及。) | ・「社会風俗」の章 (神足裕司氏執筆) の「～なう」の項にて「Twitter (ツイッター)」に言及。 (・「現代音楽」の章 (石田一志氏執筆) の「この分野を読む」の欄にて「ツイッター」「ツイッター・オペラ」に言及。) |
| 2012年版 | ○「ツイッター[Twitter]」が立項。 | ○「Twitter (ツイッター)」が立項。 | ○「ツイッター[twitter]」が立項。 | ・「流行観測」の章 (神足裕司氏執筆) の「ソーシャルメディア」の項にて「Twitter (ツイッター)」に言及。 (・「アラブの春 ジャスミン革命から中東世界を読む用語集」の章 (立山良司氏、保坂修司氏執筆) の「この特集を読む」の欄にて「Twitter革命」に言及。) |
| 2013年版 2014年版 | | ○「Twitter (ツイッター)」が立項。 | ○「ツイッター (Twitter)」が立項。 | ・「情報技術」の章 (白鳥 敬氏執筆) の「短縮URL[URL Shortening]」の項にて「ツイッター (Twitter)」に言及。 |

※ ○印： 立項されている場合 ・印： 立項されておらず、別後の解説文中にて出現した場合

※※ 「」内は、立項されている場合は見出しの表記、本文中での言及の場合は出現した表記 (アルファベット表記の頭文字の大文字小文字の違いもママ)。

すなわち「日本語化し日本語として使われる」(以上、カッケンブッシュ寛子・大曾美恵子1990)と指摘されている。そして、日本語化した外国語は、外来語として、現代日本語の書記言語において、カタカナで表記される。つまり、外国語が外来語として日本語の語彙体系に取り入れられるということは、当該外国語が、音声言語においては「日本語の音韻体系の許容範囲内で発音され」(カッケンブッシュ・大曾1990)、書記言語においてはカタカナ⁵⁾で表記される、ということを意味する。

以上に述べたことを、具体例を一つ上げて説明しよう。たとえば、love [lʌv] という英語を外来語として日本語の語彙体系に移入する際には、「日本語の音韻体系の許容範囲内で発音」(カッケンブッシュ・大曾1990)するために以下のような操作がなされる。

(2)①日本語の音韻体系は、音節 (=「基本的に母音を中心とする音のまとまり」窪蘭晴夫1999) が子音ではなく母音で終わることが基本である (窪蘭1999などを参照) ため、[lʌv]の[v]のうしろに母音[w]を挿入する (なぜ[w]を挿入するのかについても、窪蘭1999の議論などを参照)。

②日本語の音韻体系に存在しない[l] [ʌ] [v] という音を、それぞれ、発音が似ていて、なおかつ日本語の音韻体系に存在する[r] [a] [b] という音に置き換える。

③以上の操作により、「日本語の音韻体系の許容範囲内で発音」(カッケンブッシュ・大曾1990) できる[rabuw]という形が形成される。そして、形成された[rabuw]という外来語について、それぞれ[r] [a] [b] [u]に対応するカタカナを当てることで、「ラブ」という外来語の表記も成立する。

以上のような過程を経て、外国語が外来語として日本語の語彙体系に取り入れられていくわけであるが、(1)の②の事実は、(2)に示したような外国語の日本語化 (= 外来語化) の過程において、カタカナ表記にゆれ

が存在すること、また、そのゆれが、数年で収束していく場合もあることを示唆しているように見えるのである。

実は、外来語にはゆれ⁶⁾が存在することは外来語を概説した文献⁷⁾には必ず取り上げられており、特に目新しいテーマではない。しかし、外国語の日本語化の過程に観察されるゆれの実態をつぶさに記述した先行研究は、管見の範囲では見当たらない。そこで本稿では、「Twitter」という外国語をどのようにカタカナ表記するかという問題をテーマに、外国語の日本語化の様相を、通時的、計量的に記述することで、外来語の日本語化の過程に観察されるカタカナ表記のゆれが意味するところを考えていきたい。

本稿では、まず、2. 節で外国語の日本語化、中でもカタカナ表記の問題を考える際に必要となる基礎知識を紹介する。続く3. 節で、現代日本語では「Twitter」という外国語をどのようにカタカナ表記しているかという問題を、新聞・雑誌記事のデータベースと「Yahoo! 知恵袋」を利用して通時的、計量的に記述する。4. 節では、3. 節での結果を踏まえ、考察を行う。最後に5. 節で、本稿のまとめを行う。なお、2. 節は教育学部の紀要に掲載する文章という性格上、日本語学の知識をお持ちでない読者を想定して設けたものである。日本語学の知識をお持ちの方は、3. 節からお読みいただいても問題ないことを付記しておく。

2. 前提編

2.1. 在来音と外来語音、慣用主義と原音主義

前節でも触れたとおり、現代日本語の外来語に観察されるゆれの問題は、種々の先行文献で取り上げられている。それでは、なぜ、そのようなゆれが生じるのであろうか。それは、前節(2)で説明したような、外国語を日本語の音韻体系に適応させる際の操作を行う際に、「慣用主義」と「原音主義」と表現される二つの立場が存在するからである。つまり、外国語を日本語の語彙体系に取り入れる際、慣用主義に立つか、原音主義に立つかによって、同一の外国語であっても異なる表記、発音の外来語となり、その結果、外来語のゆれが生じてしまう、ということである。

それでは、日本語における外来語形成の慣用主義と原音主義とは、いったいどのようなものなのであろうか。本稿では、石野博史(1989)の言を借りて、以下のように説明したい。

(3)慣用主義： 在来音を重視する立場

原音主義： 外来語音を重視する立場

なお、(3)の説明に出てくる「在来音」と「外来語音」とは、以下の(4)のような音のことである((4)の説明も、石野1989の言を借りた)。

(4)在来音： 和語と漢語においても用いられる音。

外来語音(外来音)： 部分的にはあるが、外来語の発音において用いられ、ある程度一般的になった外国語の音。外来語にのみ現れ、和語、漢語には現れない音。

在来音、そして外来語音の具体例は、次節の議論を参照していただきたい。具体的な音の問題は次節で詳しく論じるので、本節では、外国語を日本語の語彙体系に取り入れる際には、慣用主義と原音主義という二つの立場があるということだけ、押さえていただければ十分である。参考までに、telephone [teləfoun], sexy [seksi] という英単語を日本語に取り入れる際の二つの立場の相違を示すと、以下のようなになる(カタカナ表記の後の[]内の記号は発音を表す。なお、以下に示した以外の取り入れ方もありうることを、付記しておく)。

(5)慣用主義： テレホン [terehon]

セクシー [sekɯɕi:]

原音主義： テレフォン [terefon]/ [tereɸon]

セクスィー [sekɯsi:]

なお、慣用主義に立つか、原音主義に立つかの問題については、カッケンブッシュ・大曾(1990)に、以下のような記述がある⁸⁾。

(6) アメリカの言語学者Bloch(1950)⁹⁾は日本語を「保守的日本語 "conservative Japanese"」と「進歩的日本語 "innovating Japanese"」に分け、前者を外国語の影書がないもの、後者を影響を受けたものとしている。この分類によれば、「チーム」[tɕi:mu], 「ツー」[tsu:] は保守的日本語の枠組みで受け入れられて定着した発音であり、「ティーム」[ti:mu], 「トゥー」[tu:] は進歩的日本語の普及を示す発音で

ある。

ここで一つ問題なのは外来語の入ってきた年代を特定することが非常に難しいということである。早く入ってきたものでもあまり一般的に使われず、英語の分かる専門家によってのみ使われたものにはいわゆる「進歩的日本語」の枠組みで処理された場合があると思われる。「パーティー」のように新しく入った「ティ」のほうが定着したものもあるが、「アスレチック、エロチック、オートマチック、ドラマチック」の「-チック」"-tic"のように比較的新しく借用されたと思われる単語においても五十音ズの「チ」が見られるものもある。それでは"-tic"はすべて「-チック」のようになるのかというとそうでもなく、「ジャーナリスティック、ヒューマニスティック、リアリスティック」のように「-ティック」を持つ単語も多い。従って、年代的に早く入ってきたものは従来の音韻体系で、比較的最近に入ってきたものは新しい音韻体系で処理されるというのは絶対的な規則ではない。

(6)の引用文中でいう「保守的日本語"conservative Japanese"」、「進歩的日本語"innovating Japanese"」とは、本稿の表現でいうと、それぞれ、「慣用主義」的表記、「原音主義」的表記、となるが、(6)のカッケンブッシュ・大曾(1990)の指摘は示唆に富む。すなわち、直感的には、比較的最近に日本語に流入してきた外来語は原音主義の立場で処理しているようにも思われるが、実際は必ずしもそうではなく、元になった外国語では同じ発音であっても、日本語の語彙体系に取り入れる際には、様々な要因(その外国語の単語の意味や、当該外国語を受け入れる日本語話者のバックグラウンドなど)も関与している可能性を指摘しているからである¹⁰⁾。とはいえ、外来語における慣用主義と原音主義の「せめぎあい」の様相の先行研究を簡潔にまとめている井上史雄(2002)や塩田雄大(2012)を踏まえると、およそ、若い世代では原音主義が優勢であるのも事実ではある。

2.2. 在来音と外来語音の具体例—内閣告示『外来語の表記』に基づいて—

前節では、外国語を日本語に取り入れる際には、慣用主義というべき立場と原音主義というべき立場の二つがあることを説明した。それぞれの立場は、前者が在来音重視、後者が外来語音重視ということであったが、それでは、具体的に在来音、外来語音とは、いったいどのようなものであろうか。本節では、本稿執筆時点において、現代日本語の外来語の表記に使用するカタカナの大きな指針になっている(と思われる)¹¹⁾『外来語の表記』(平成3年6月28日、内閣告示第2号)に基づいて、説明したい¹²⁾。

内閣告示『外来語の表記』(以下、『外来語の表記』と表記する)は、現在、文化庁のホームページ(http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/joho/kijun/naikaku/gairai/)にてその全体を見ることが可能であるが、以下、本稿の議論に係る箇所を、武部良明(1991)も参照にしつつ、簡単に説明する。

『外来語の表記』の「前書き」には、以下のように書かれている。

- (7) 1. この『外来語の表記』は、法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般の社会生活において、現代の国語を書き表すための「外来語の表記」のよりどころを示すものである。
2. この『外来語の表記』は、科学、技術、芸術その他の各種専門分野や個人の人表記にまで及ぼさうとするものではない。
3. この『外来語の表記』は、固有名詞など(例えば、人名、会社名、商品名等)でこれによりがたいものには及ぼさない。
4. この『外来語の表記』は、過去に行われた様々な表記(「付」参照¹³⁾)を否定しようとするものではない。

(5. は割愛)

以上の記述を見ると、『外来語の表記』は、あくまで「よりどころ」であり、外来語を表記する際、必ず『外来語の表記』に記載された内容を墨守しなければならないという性格のものではない、ということが分かる。したがって、『外来語の表記』が存在しているからといって、現代日本語における外来語(の表記)にゆれが生じ得ないということではない、ということも推察できる。

さて、『外来語の表記』の本文には、以下の図1のようなカナの表が示されている(本稿で示した図1は、http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/joho/kijun/naikaku/gairai/honbun01.htmlより引用した)。

図1に示した『外来語の表記』の「第1表」と「第2表」の性格の違いについては、『外来語の表記』の本文の「『外来語の表記』に用いる仮名と符号の表」の項において、以下のように説明されている。

- (8) 1. 第1表に示す仮名は、外来語や外国の地名・人名を書き表すのに一般的に用いる仮名とする。
 2. 第2表に示す仮名は、外来語や外国の地名・人名を原音や原つづりになるべく近く書き表そうとする場合に用いる仮名とする。
 3. 第1表・第2表に示す仮名では書き表せないような、特別な音の書き表し方については、ここでは取決めを行わず、自由とする。
 (4. は割愛)

| 第1表 | | | | | | | | | |
|-----|---|----|----|---|----|----|--|----|----|
| ア | イ | ウ | エ | オ | | | | シ | |
| カ | キ | ク | ケ | コ | | | | チ | |
| サ | シ | ス | セ | ソ | ツ | ア | | ツ | エ |
| タ | チ | ッ | テ | ト | | | | ツ | オ |
| ナ | ニ | ヌ | ネ | ノ | フ | ア | | フ | エ |
| ハ | ヒ | ム | ヘ | ホ | | | | ジ | |
| マ | ミ | ユ | メ | モ | | | | デ | |
| ヤ | | | | ヨ | | | | デュ | |
| ラ | リ | ル | レ | ロ | | | | | |
| ワ | | | | | | | | | |
| ガ | ギ | グ | ゲ | ゴ | | | | | |
| ザ | | ズ | ゼ | ゾ | | | | | |
| ダ | | | デ | ド | | | | | |
| バ | ビ | ブ | ベ | ボ | | | | | |
| パ | ピ | プ | ペ | ポ | | | | | |
| 第2表 | | | | | | | | | |
| キャ | | キュ | キョ | | | | | イエ | |
| シャ | | シュ | シヨ | | ウ | イ | | ウエ | ウオ |
| チャ | | チュ | チヨ | | ク | ク | | クエ | クオ |
| ニャ | | ニユ | ニヨ | | | ツイ | | | |
| ヒャ | | ヒユ | ヒヨ | | | | | トウ | |
| ミャ | | ミユ | ミヨ | | グ | ア | | | |
| リャ | | リユ | リヨ | | | | | ドウ | |
| ギャ | | ギユ | ギヨ | | ヴァ | ヴィ | | ヴエ | ヴオ |
| ジャ | | ジュ | ジヨ | | | | | チュ | |
| ビャ | | ビユ | ビヨ | | | | | フユ | |
| | | | | | | | | ヴユ | |

ン (撥音)
 ッ (促音)
 ー (長音符号)

図1 内閣告示『外来語の表記』に示されたカナの表

ただし、上記の記述は、現代日本語研究の知見に鑑みると、何をもって「一般的に用いる」と判断するのか、など心もとない点が存在する。そこで、以下、少々長くなるが、武部 (1991) の記述を引用することで、『外来語の表記』で示された「第1表」と「第2表」の性格を明示したい (引用文中の下線は筆者による。下線部は、第18期国語審議会が1991年2月8日に文部大臣へ答申した『外来語の表記』の「前文」に、ほぼ同様の表現が見られる部分である¹⁴⁾)。

- (9) すなわち、第一表の左欄のほうが、現代の和語と漢語を構成する一〇〇の音に対応する仮名と、撥音・促音・長音の書き表し方を併せたものである。これらの仮名の部分は、現代仮名遣いに用いる仮名から「ち・づ・を」と「ぢゃ・ぢゅ・ぢょ」を除いたものと同じであり、特に目新しいものではない。また、撥音・促音の書き表し方も現代仮名遣いと同じである。(中略)

まず、第一表右欄の一三の仮名であるが、これらは、言い分け聞き分けの上で余り無理がなく、外来音として日本語の中に定着していると考えられる音に対応する仮名として選ばれたものである。その点でいえば、これら一三の仮名と左欄とを併せた全体が、外来語や外国の地名・人名を書き表すのに一般的に用いる仮名となるのである。

これに対して、第二表に掲げた二〇の仮名であるが、定着度において第一表右欄に劣る点が、特に分けられた理由である。すなわち、言い分け聞き分けの上では十分安定していないが、外来音としてある程度は日本語の中に定着していると考えられる音に対応する仮名として選ばれたものである。これらが、外来語や外国の地名・人名を原音や原つづりになるべく近く書き表そうとする場合に用いる仮名なのである。

しかし、前書きを読むと、一覧表に掲げられた以外の仮名について、その使用が全く禁じられたわけではない。実際問題として、さまざまな状況に応じてこれら以外の音を仮名で書き表すことが必要

な場合もあり、過去の表記等についても否定しようとするものではない、となっている。(中略)

したがって、今回の答申全体として見ると、使用する仮名を四つの段階に分けたと考えることが可能である。それらは、(1)第一表左欄の仮名、(2)第一表右欄の仮名、(3)第二表の仮名、(4)それ以外の仮名、という四段階である。

以上の武部(1991)の記述を踏まえて、図2として示した『外来語の表記』の「第1表」「第2表」に存在するカナを、2.1. 節で説明した在来音と外来語音という枠組みに位置づけるならば、以下のようなスケールを描くことができよう。

(10)在来音 ← 「第1表」の左欄のカナ・「第1表」の右欄のカナ・「第2表」のカナ
・表に存在しないカナ → 外来語音

すなわち、『外来語の表記』の「第1表」の左欄で示されたカナが在来音であり、『外来語の表記』の「第2表」や『外来語の表記』の表には掲載されなかったカナが外来語音であり、『外来語の表記』の「第1表」の右欄で示されたカナは在来音と外来語音の中間(在来音ではないが、ある程度日本語音韻体系に定着しつつあるという意味で、完全な外来語音とは言い難い音)ということである¹⁵⁾。

2.3. 外来語における「表記のゆれ」と「発音のゆれ」

本稿で扱う現象、すなわち、「Twitter」という語を「トゥイッター」と表記するか、それとも「ツイッター」するかという現象は、基本的には、同一語に複数の表記が観察される「表記のゆれ」の問題である。ただし、ここで注意しなければならないのは、特に外来語の場合、以下の石野(1989)の指摘にもある通り、表記と発音とは同一視できない、という点である。

(11)外来語の場合、語形として通常考えられているのは、片仮名で表記した形であることが多い。しかし、表記が必ずしも現実の発音を正確に表しているとは限らない。人によっては、表記のいかにかわからず、原語にきわめて近く発音するし、逆に、在来音でしか発音できない人もいる。

石野(1989)が指摘するような現象の存在は、以下の遠藤織枝(1989)が指摘するような問題を生む。

(12)なお、teamはどの媒体も「チーム」と表記していて「ティーム」の表記はなく、表記に関するゆれはないが、音声の上では「ティ」音で発音されることも多くなっている。これに関して『NHK』¹⁶⁾では表記面で「チーム」を立て「ティーム」はとらないとしながら「(ただし放送では「ティ」に近い発音も可)」と注記している。「ティーム」と発音されることも認められている¹⁷⁾となると発音と表記のゆれが新しい問題として出てくる。

さらに、小椋秀樹(2013)には、以下のような記述がある。

(13)例えば、「コンピューター」は、語末を長音化した発音を写したもので、「コンピュータ」は語末を短呼した発音を写したものであって、厳密な意味での語表記のゆれには当たらない。それにもかかわらず、これらが外来語表記のゆれとして扱われるのは、語表記のゆれか発音のゆれかの判定が難しいことによる。つまり「コンピューター」と書かれていても「コンピュータ」と、「コンピュータ」と書かれていても「コンピューター」と発音する人がいる可能性は高く、語末の長音符号の有無を発音の違いによるものと言い切れないのである。

以上の指摘を踏まえると、外来語に観察される「ゆれ」は、「表記のゆれ」(同一語に複数の表記が観察される現象)と「発音のゆれ」(同一語に複数の発音が観察される現象)が複雑に絡み合ってくるということが分かる(石野博史1991での議論も参照)¹⁸⁾。

そのような事情を本稿で取り上げる現象に即して考えるならば、以下のようなだろう。

(14) ツイッター : [tsuitt̚a:]
トウッター : [tuitt̚a:] [tuitt̚a:] [tsuitt̚a:] → 発音のゆれ
↓
表記のゆれ

※慣用主義表記である「ツイッター」の方には、恐らく発音のゆれは観察されないと思われる¹⁹⁾。

2.4. 本節のまとめ

本節での議論をまとめると、以下のとおりになる。

(15)①現代日本語において、外国語を日本語化する際の立場としては、主に、慣用主義と原音主義という

二つが存在する。

- ②現代日本語において、外国語を日本語化する際のカタカナ表記の指針、目安として、内閣告示『外来語の表記』がある。その『外国語の表記』には、慣用主義に対応できるカタカナは勿論（第1表）、原音主義に対応できるカタカナ（第2表）も設定されている。
- ③ただし、『外来語の表記』はあくまで目安であるため、外来語の表記にゆれが生じ得る。
- ④外来語のゆれを考える際には、「表記のゆれ」なのか「発音のゆれ」なのか、という点を考慮する必要がある。

3. 調査編

3.1. 調査対象表記

本稿の調査対象は、1. 節で述べたとおり、「Twitter」という英単語のカタカナ表記である。これも1. 節で確認したとおり、現代日本語においては、少なくとも、「Twitter」は「ツイッター」という表記と「トゥイッター」という表記が認められる。本稿では、その2種類の表記の使用の傾向を、通時的かつ計量的に記述していく。つまり、本稿の調査のポイントは、「Twitter」([twittər])という英単語の[tw]という音に「ツ」というカナを当てるか、「トゥ」というカナを当てるかという点にある。そして、前節で確認した事項を踏まえると、「ツ」というカナを当てるのが慣用主義の立場であり、「トゥ」というカナを当てるのが原音主義の立場であるといえる²⁰⁾。

なお、「Twitter」を外来語として日本語の語彙体系に取り入れる際に、「ツ」と「トゥ」以外に、語末の長音を表記するか否かも問題になり得る。すなわち、「ツイッター／トゥイッター」か「ツイッタ／トゥイッタ」かという問題である。

語末の長音の問題は、(13)に引用した小椋(2013)でも触れられている通り、外来語の表記のゆれの問題を考える際には、しばしば言及される事柄である。しかし、語末の長音の有無は、前節で述べた慣用主義と原音主義には、直接的には関係しない²¹⁾。したがって、本調査では、語末の長音の有無については問題にしないことにする（次段落での議論も参照）。

さて、本格的な調査に入る前に、現代日本語における全体的な傾向を掴むために、goo検索²²⁾で「ツイッター」「トゥイッター」「ツイッタ」「トゥイッタ」という四つのカタカナ表記を検索したところ（2014年6月22日検索）、以下のような結果が得られた。

| | | |
|-----------|---------------------|---------------------------|
| (16)・慣用主義 | ツイッター： 約16,000,000件 | ツイッタ： 約232,000件 (0.0145)* |
| ・原音主義 | トゥイッター： 約30,700件 | トゥイッタ： 約340件 (0.0111)* |

※カッコ内の数字は、語末の長音のない表記の件数を語末の長音がある表記の件数で割った値

以上の結果を見る限り、少なくとも2014年6月時点では、「Twitter」をカタカナ表記する場合、「ツイッター」とするのが多数派であるということが分かる。また、慣用主義的カタカナ表記、原音主義的カタカナ表記双方、語末の長音表記がない件数は、語末の長音表記ある表記の件数の100分の1程度と僅少であるため、今回は語末の長音表記がある「ツイッター」と「トゥイッター」を調査対象とすることにした。

3.2. 調査対象資料

本調査では、①新聞・雑誌記事と、②「Yahoo! 知恵袋」という二つの言語資料を対象にする。

①新聞・雑誌記事は、岡田祥平(2014, 印刷中)でも利用した、@niftyが提供しているサービス「新聞・雑誌記事横断検索」(<http://business.nifty.com/gsh/RXCN/>)。以下、「新聞・雑誌記事横断検索」と表記する)²³⁾を利用する。このサービスの詳細、ならびに言語研究に利用する際の留意点などは岡田(2014, 印刷中)を参照されたいが、当該サービスを利用する最大の理由としては、当該サービスが「最大で1984年8月（朝日新聞記事情報）から、朝日、読売、毎日、産経の全国紙の他、地方紙、専門紙、経済誌等の過去記事を一括して検索でき」(上記URLのページ内の説明文より)、2014年6月現在では「146紙誌・5000万記事以上」が検索の対象となっているという点である(<http://business.nifty.com/cs/bd-category/category/news1/1.htm>)。また、新聞・雑誌記事は、流行にも敏感で、Twitterが日本に導入された初期の時点からTwitterに言及した記事があることが予想される(Twitterの紹介記事など)。つまり、新聞・雑誌記事を調査対象にす

ることで、Twitterが日本に導入された初期の時点のカタカナ表記の用例が採集できることが期待できる。

しかし、その一方で、岡田（印刷中）でも論じたように、また関根健一（2012）でも示唆されているように、新聞・雑誌記事を利用した言語調査、特に表記や単語使用の実態調査には、ある種の危険性が伴う。それは、新聞社や出版社には各社が独自に設定した表記や単語使用の基準²⁴⁾が存在し、その基準に調査結果が左右される可能性がある、という点である。つまり、新聞・雑誌記事を利用して言語調査を行い、何らかの傾向を見出すことが出来たとしても、その傾向は単に新聞社、雑誌社の表記、単語使用の基準の変遷を確認しただけであり、一般的な日本語使用者の傾向（後述するが、何を以て「一般的な日本語使用者」と見なすのかというのは、実は大変大きな問題ではあるが）とは異なる可能性がある、ということである。

そこで、今回は、一般的な日本語使用者（新聞・雑誌記事のように、何らかの基準に左右されることが、相対的に少ないと思われる²⁵⁾人々）の傾向を見出すため、「Yahoo! 知恵袋」（インターネット上の質問サイト。http://chiebukuro.yahoo.co.jp/）も調査対象にすることにした。

「Yahoo! 知恵袋」の言語資料的性格については岡田（2014）でも論じたので、ここでは、一般的な日本語使用者の傾向を見出すために「Yahoo! 知恵袋」を利用する理由だけ、簡単に説明しておく。

岡田（2014）でも紹介したが、小磯花絵ほか（2009）は、小磯ほか（2009）発表時に「構築中の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）²⁶⁾と、2005年に一般公開された『日本語話し言葉コーパス』（CSJ）²⁷⁾」に格納された七つの言語資料（「(1)行政白書、(2)新聞²⁸⁾、(3)小説、(4)WEB データ（電子掲示板サイト「Yahoo! 知恵袋」、(5)国会会議録²⁹⁾を、CSJ から、(6)学会講演、(7)模擬講演（主に個人的内容に関する一般人によるスピーチ）」（小磯ほか2009）を対象に、先行研究において各種文章のジャンルの判別に有効と思われると指摘された六つの指標を利用し、分析対象とした七つの言語資料のタイプを推定するモデルを、ステップワイズ変数選択（変数増減法）で求めている。その結果、「専門性や改まり度の程度、あるいは書き言葉的／話し言葉的なもの」を分けるという基準においては、「白書、新聞、小説・WEB 掲示板・話し言葉」という順番に並んだという。

小磯ほか（2009）の指摘を踏まえると、「Yahoo! 知恵袋」は、文体的な「改まり度」が低い傾向であるといえる。一方、新聞記事は、文体的な「改まり度」が高い傾向にあると言える。すなわち、本調査対象である新聞・雑誌記事と「Yahoo! 知恵袋」は、表記、単語使用に対する基準の有無に加え、文体的な「改まり度」についても対照的であるといえる。したがって、新聞・雑誌記事と言語資料的性格を異にする「Yahoo! 知恵袋」を一般的な日本語使用者の傾向を見出す資料と位置づけ、調査対象に据えた次第である。

なお、本調査で利用する「新聞・雑誌記事横断検索」も「Yahoo! 知恵袋」も、日時を指定した検索が簡単に行えるため、通時的な研究を行うのに適しているという点も、今回の調査でこの両者を調査対象に選定した理由であるということも、付記しておく。

3.3. 本調査の問題意識

3.1. 節で、本稿の調査のポイントは、「Twitter」[twɪtər]の[tw]という音に「ツ」という慣用主義的なカナを当てるか、「トゥ」という原音主義的なカナを当てるかという点にあると述べたが、この件に関連して、遠藤（1989）に、以下のような記述が見られる。

(17) ツアー、ツイード、ツイスト、ツートンカラー、ツーピース、ツーリスト」と、tと母音、tとwの続く音を「ツ」で表記するものは多い。しかし、これらを「トゥ」で表記する例が最近の新聞、雑誌にみられる。トゥ音の表記も「トゥ」とする例である。「トゥ・マッチ、トゥ・ハーツ、トゥイーター、トゥディ、トゥエンティ」などである。

(17)の遠藤（1989）の指摘を踏まえると、Twitterが普及した2000年代後半においては、遠藤（1989）が書かれた時代以上に、[tw]という音に「ツ」というカナを当てる慣用主義よりも、「トゥ」というカナを当てる原音主義が優勢であることが予想される。しかし、現在（2014年6月時点）、3.1. 節の(16)に見たように、原音主義的な「トゥイーター」というカタカナ表記よりも「ツイッター」という慣用主義的なカタカナ表記の使用が優勢である。また、1. 節の表1で確認したとおり、2010年版『現代用語の基礎知識』には、「トゥイーター」というカタカナ表記しか観察されない。この傾向は、(17)の指摘と矛盾するようにも思える。この点については、どのように考えるべきであろうか。

この問題に関しては、石綿敏雄（2001）の以下の記述が示唆に富む。

(18) ツにたいするトゥはチに対するティほど、音の面でも表記の上でも安定していない。そこで新しい外来語でも、ツになることがある。ツール (tool)、ツールバー、ツイーター、ツーショット、フランス語のツールドフランスなどである。トゥのほうはトゥイナー「アメリカの中間層」、トゥインクル (レース)、トゥエンティーワンなど英語でうしろにWのある時に比較的安定して現れるようである。あるいはまだ外国語のにおいのこるトゥー・ヤングなどに使われる。

原語で[tu]という発音を持つ語は「新しい外来語」でも「ツ」で受容される場合もあるという石綿 (2001) の指摘は、「Twitter」が「トゥイッター」でなく「ツイッター」の使用が優勢である現状を説明するのに都合がいい。しかし、石綿 (2001) は、同時に「英語でうしろにWのある時に比較的安定して」「トゥ」が現れると指摘するが、そうであるならば「Twitter」は「トゥイッター」という表記で受容されるべきであるのに、既に繰り返し述べているように、実際はそうではない。

結局のところ、原語で[tu]という発音を持つ語の日本語化の立場としては、原音主義 (すなわち、「トゥ」で受容される傾向が優勢とされる指摘 (17) と、「新しい外来語」でも「ツ」で受容されるという指摘 (18) という相反する指摘がある、ということになる。しかも、「英語でうしろにWのある時に比較的安定して」「トゥ」が現れるという石綿 (2001) の指摘 (18) もあるが、外来語としての「Twitter」のカタカナ表記の問題は、(16) で見たとおり「ツ」で受容される傾向があり、石綿 (2001) の指摘とも矛盾する状態にある。

ここまでの議論をまとめると、Twitterが日本に流入した時期 (2008年ごろ) には、「ツイッター」という慣用主義的なカタカナ表記と「トゥイッター」という原音主義的なカタカナ表記の双方が拮抗した状況で使用されていた³⁰⁾ にも関わらず、徐々に「ツイッター」というカタカナ表記が優勢になっていった、ということになる。そして、なぜそのような推移を見せるのかという理由は、先行研究の指摘では、必ずしも説明できない、ということになる。

そのような事実を踏まえうえて、本稿で明らかにしたい点は以下の三つである。

(19) ① Twitterが日本に流入した時点におけるカタカナ表記の使用傾向

② その後、「トゥイッター」という原音主義的なカタカナ表記が衰退していく過程

③ 「トゥイッター」という原音主義的なカタカナ表記 (発音) を使用するのはどのような人か

以上、三つの観点は、2. 1. 節の(6)で紹介したカッケンブッシュ・大曾 (1990) が指摘した問題、すなわち、どういう場合に原音主義的なカタカナ表記が採用され、どういった場合に慣用主義的なカタカナ表記が採用されるか、という問題の一端を明らかにできるのではないかと考える。

3. 4. 調査対象期間—日本におけるTwitterの受容史概観

前節の(19)で、本調査では「Twitter」のカタカナ表記の変遷を観察すると述べたが、そのためには、日本におけるTwitterの受容史を概観する必要がある。そこで、本節では、津田大介 (2009) と神田敏晶 (2009) を参照に簡単にまとめる。

Twitterが始まったのは、2006年7月、アメリカでのことであった。その後、2008年4月に日本語版のTwitterも提供される。

この時期の経緯として、津田 (2009) には、以下のような指摘がある。

(20) 実は、日本語版サービスが始まる前から、ツイッターには日本人ユーザーが多く、08年2月の時点では米国に次ぐユーザー数を占めていた。しかし、それはあくまで「アーリアアダプター」と呼ばれる新しもの好きな層だけが利用していたに過ぎない。

2008年時点での日本では、「新しもの好きな層だけが利用していた」Twitterであるが、以下の図2に示す通り、2009年6月以降、日本におけるTwitter利用者数が急増する。その理由として、津田 (2009) や神田 (2009) は、2009年には、Twitterが注目を集めるようになった種々の出来事が日本で起きたとまとめている。具体的には以下のような出来事である。

(21) 2009年3月 NHK-BSの番組「きょうの世界」がTwitterを取り上げる。

5月 朝日新聞の土曜版「be」でTwitterの解説記事が掲載される。

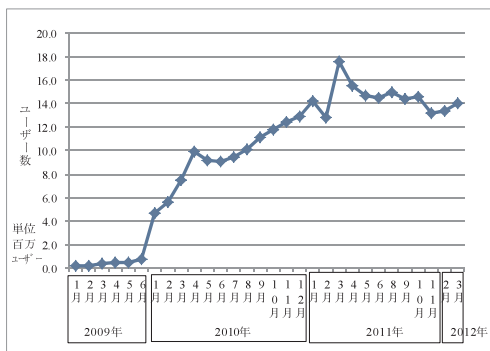
6月 朝日新聞がTwitterの公式アカウントを開設。10日に開催されたサッカー・ワールドカップ予選の日本戦をリアルタイムで「中継」する。

元ライブドアCEOの堀江貴文氏がTwitterを開始。

7月 経済評論家の勝間和代氏が本格的にTwitterを利用する（勝間氏がTwitterのアカウントを取得したのは2009年4月）。

8月 衆議院選挙公示を前に、多くの与野党議員やスタッフがTwitterを利用した広報活動を開始。

26日にテレビ東京のニュース番組「ワールドビジネスサテライト」がTwitterを紹介（その翌日、日本のTwitterの窓口であるデジタルガレージの株価がストップ高となる）。



※ アクティブユーザー数を集計。ネットレイティングス社公表資料、各社公表資料及び総務省資料により作成。

※ 総務省『情報通信白書 平成24年版（HTML版）』で公開されている数値を元に、筆者がグラフ化した。

※ ユーザー数のデータは以下のページからダウンロードできる。

<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h24/html/mc123220.html>

※ 2009年7月から12月、2011年7月・12月、2012年1月のユーザー数のデータは公開されていなかった。

図2 日本におけるTwitterのユーザー数の推移（2009年1月から2012年3月までの期間）

以上のような動向を、津田（2009）は以下のようにまとめている。

(22) 既存メディアが様々な要因でツイッターを取り上げざるを得なくなり、メディアに触発された著名人たちがツイッターを使い始め、その生のつぶやきを読みたい人が流入し、またメディアで取り上げられる——まず、メディアが客を呼び、客が客を呼ぶという正のスパイラルが日本で急速に回転し始めたのが09年3月から8月にかけての出来事だったと総括できるのではないか。

以上の経緯をまとめると、2006年にアメリカでTwitterが開始されて以降、日本語使用者の間でも一定数のTwitterユーザーが存在したが、日本においてTwitterが市民権を得たのは2009年以降である、と言えるだろう。そのような経緯を踏まえた上で、本調査では、2006年から2013年までの期間について、3.2.節で紹介した二つの言語資料におけるTwitterのカタカナ表記の実態を、計量的、通時的に調べることにした。

3.5. 調査結果

3.1.節から3.3.節までに述べてきた事柄に則って調査を行ったところ、以下の表2（「新聞雑誌記事検索」、表3（「Yahoo! 知恵袋」）のような結果が得られた（表2、表3の「トゥイッター率」とは、「トゥイッター」のヒット件数を、「ツイッター」のヒット件数と「トゥイッター」のヒット件数の和で割ったものを%で表したものである）。

なお、「Yahoo! 知恵袋」には、「トゥイッター」という表記の言及例³¹⁾が散見される。たとえば、以下の場合の下線部のようなものである（下線部は筆者）。

(23)なぜ任天堂の岩田社長はTwitterのことをトゥイッターと言うのですか？

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q11110572806

このようなものは、「トゥイッター」の表記の使用例と見なすことは不適当だと考えられるため、表3の件数からは、「トゥイッター」の言及例の件数は差し引いている。

表2 「新聞・雑誌記事検索」における「ツイッター」と「トゥイッター」のヒット件数と「トゥイッター」率（年代別）

| | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 |
|---------|------|--------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|
| ツイッター | 0 | 5 | 9 | 519 | 7533 | 11874 | 13053 | 19163 |
| トゥイッター | 0 | 4 | 7 | 33 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| トゥイッター率 | 0% | 44.44% | 43.75% | 5.98% | 0.01% | 0% | 0% | 0% |

表3 「Yahoo! 知恵袋」における「ツイッター」と「トゥイッター」のヒット件数と「トゥイッター」率（年代別）

| | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 |
|---------|------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|
| ツイッター | 0 | 0 | 3 | 230 | 12657 | 25833 | 25027 | 22971 |
| トゥイッター | 0 | 0 | 0 | 2 | 12 | 5 | 6 | 6 |
| トゥイッター率 | 0% | 0% | 0% | 0.86% | 0.09% | 0.02% | 0.02% | 0.03% |

表2, 表3からは, 以下のような事実を読み取ることができる。

- ②④①日本語使用社会において, 「ツイッター」もしくは「トゥイッター」という単語が使用されるようになったのは, 新聞・雑誌記事では2007年頃から, 一般的な日本語使用者（「Yahoo! 知恵袋」）では2009年頃からである。これは, 3. 4. 節で確認した日本におけるTwitterの受容史, すなわち, 日本においてTwitterが市民権を得たのは2009年以降であるという点, そして, それ以前にも日本語のTwitterユーザーはいたが, それは主に「新しもの好きな層」（津田2009）であるという傾向と, 概ね呼応する（新聞・雑誌記事の執筆者は, 社会の動向に敏感でもあり, いわゆる「新しもの好き」が多いと考えられる）。
- ②新聞・雑誌記事, 「Yahoo! 知恵袋」双方, 2009年から2010年にかけて, 「ツイッター」のヒット件数が爆発的に増加する。
- ③新聞・雑誌記事においては, ヒット件数が認められ始めたころ（2007年, 2008年）は「ツイッター」と「トゥイッター」が拮抗して使用される（ただし, その2年間は用例数が非常に少ないことに注意を要する）。しかし, 「ツイッター」のヒット件数が増えた2009年は「トゥイッター」が殆ど使われなくなり, 2011年以降は「トゥイッター」は全く使用されなくなった。
- ④「Yahoo! 知恵袋」では, ヒット件数が認められ始めたころ（2008年, 2009年）から, ほぼ「ツイッター」しか使用されない。しかし, 新聞・雑誌記事とは異なり, 「ツイッター」のヒット件数が爆発的にヒットするようになった2010年以降も, 毎年, 数件ではあるが, 「トゥイッター」がヒットする。

本調査の結果得られた②④の事実について, 次節で考察を行う。

4. 考察・議論編

本調査の結果の概要は, 前節の(24)にまとめたとおりである。(24)の結果をさらにまとめると, 以下の(25)のようになるであろうか。

- (25)①Twitterが日本にもたらされた頃は「ツイッター」という慣用主義的なカタカナ表記と「トゥイッター」という原音主義的なカタカナ表記の双方が使用されていた（(24)の③）。

- ②Twitterが日本で市民権を得た2009年以降は, ほぼ「ツイッター」という慣用主義的なカタカナ表記が用いられる。

(25)の①については, 3. 3. 節で論じた内容のうち, 近年において外来語を受容する際には原音主義的傾向にあるという指摘と（本稿(17)の引用も参照）と, 原語で[tu]という発音を持つ語が日本語の外来語では「ツ」受け入れられることも多いという石綿（2001）の指摘³²⁾の相克を表しているかのようで興味深い。しかし, (25)の②の傾向は, 近年において外来語を受容する際には原音主義的傾向にあるという指摘にも, 石綿（2001）の指摘（「英語でうしろにWのある時に比較的安定して」「トゥ」が現れる）にも一致しない。つまり, (25)の結果は, 先行研究の知見のみでは, うまく説明できないのである。

それでは, (25)の結果をどのように解釈すべきであろうか。そこで, 筆者は, 3. 4. 節で説明した, 日本におけるTwitterの受容のあり方を踏まえた解釈を与えたい。

(25)の②でまとめたとおり（(24)の③と④も参照）, 新聞・雑誌記事, 「Yahoo! 知恵袋」ともに, 2009年以降, 慣用主義的なカタカナ表記である「ツイッター」しか, ほぼ使用されなくなる。一方, 2009年以降というのは, 3. 4. 節で説明したとおり, Twitterが日本社会に定着した時期である。すなわち, 慣用主義的なカタ

カナ表記である「ツイッター」しかほぼ使用されなくなった時期と、Twitterが日本社会に定着した時期とは、偶然にも、呼応しているのである。

この事実をどのように考えるべきであろうか。そのためには、今一度、外来語受容における慣用主義が意味するところを考えたい。

外来語受容に関する慣用主義とは、2.1. 節で見たとおり、外来語を在来音で取り入れる態度のことである。そして、在来音とは、2.1. 節の(4)で見たとおり、和語と漢語において用いられる音のことである。すなわち、外来語受容における慣用主義とは、外国語を日本語の中核をなす和語、漢語³³⁾で使用される音で受容すること（和語、漢語にない音ではないこと）であり、いわば、外国語を和語、漢語を構成する要素で表現することである。つまり、慣用主義で表される外来語の音形は和語、漢語とは同一であり、外来語であっても、それを構成する語形は和語、漢語と変わらない³⁴⁾ことを意味する。すなわち、外来語を慣用主義で受容するということは、原音主義で受容するよりも、当該単語を日本語の語彙体系の中核に位置づける、ということの意味すると考えられるのである。

以上の議論を、Twitterを外来語として受容する場合に当てはめて考えてみよう。(25)の①に見たとおり、Twitterが日本に持ち込まれた当初は、原音主義的なカタカナ表記である「トゥイッター」と慣用主義的なカタカナ表記である「ツイッター」の双方が使用されていた。これは、繰り返し見てきているように、近年の日本語社会において、原語における[tu]を外来語として受容する際に原音主義を取る立場(17)が優勢であるという状況に加え、原語での[tu]を外来語として受容する際に「ツ」で受容するか「トゥ」で受容するか安定的でないという事情(18)を反映した傾向だと考えられる。

しかし、3.4. 節で見たとおり、2009年以降、日本社会において爆発的にTwitterのユーザーが増えた。このことは、日本社会においてTwitterが身近になったことを意味し、そのことは日本語語彙体系に対しても無視できない影響を与えたと考えられる。すなわち、日本社会で定着したTwitterを原音主義的なカタカナ表記である「トゥイッター」で受容すると「外来語臭」が強すぎ、日本語の語彙体系の中核に位置付けることができなくなるため、「外来語臭」が弱い慣用主義的なカタカナ表記である「ツイッター」が市民権を得た、というわけである（慣用主義的なカタカナ表記である「ツイッター」が「外来語臭」が弱いというのは、上述したとおり、慣用主義的なカタカナ表記は、日本語語彙体系の中核をなす和語、漢語でしか使用されない音しか使用しないゆえの事情による。すなわち、慣用主義で受容した外来語は、少なくとも語を構成する音という点では、日本語語彙体系の中核を担う和語、漢語と同一なため、語を構成する音からは外来語的な要素は感じられない、というわけである）。

前段落までの議論をまとめるならば、以下のようになろう。現代日本語において外国語を外来語として受容する際の立場としては、慣用主義と原音主義とがあり、現在では後者の立場の方が優勢であるという指摘もある。しかし、外来語として受容した事物の日本社会における定着度が非常に高くなった場合、外来語も原音主義的立場ではなく、慣用主義的立場で受容される。それは、原音主義的立場での受容だと「外来語臭」が強く、日本社会に定着した事物を表現するには必ずしも適当であるとは見なされないと考えられるためである。

このように考えると、本稿でまとめた(25)（ならびに、(24)の③、④）に対して、一定の解釈を与えることができる。

しかし、日本社会に定着にした事物を表す外来語が、原音主義的立場の受容から慣用主義的立場の受容に変化するというのは、(25)でまとめた傾向に対する牽強附会的な解釈であるという疑問もあろう。その疑問に対しては、Twitterのカタカナ表記以外の事例を紹介することで、回答と替えたい。

ここで紹介するのは、smartphoneとその略称をめぐる事例である。この事例については、山下洋子（2012）が簡潔にまとめているので、以下、少々長文になるが、本稿の議論に関係する箇所を引用する。

(26)「～phone」をカタカナで書く場合、どのように書けばいいだろうか。「～フォン」「～ホン」「～フォーン」「～ホーン」などがありそうだ。NHKや通信、新聞各社は国の「外来語の表記」（内閣告示）を参考に外来語の表記を決めている。NHKでは「phone」関連の語を「テレホン」「サクソフォン」など「ホ」と「フォ」で書き表しており、外来音の[fo]の表記を、「ホン」の形で定着している語とまだ定着していない語でわけている。「smartphone」は、「テレホン」から考えると「スマートホン」に

なりそうだが、語自体は新語の英語であり「ホ」の慣用が定着しているとは言えず、「フォン」になる。では略語はどうか。現在では、総務省はじめ携帯電話各社も「スマホ」を使っている。NHKの放送でも同様である。しかし、「スマホ」ではなく「スマフォ」なのではないか？ という疑問の声もある。

(中略)

「スマホ」のように元の語にない音を使う略語は珍しい。「スマートフォン」を素直に略せば「スマフォ」か「スマフォン」になる。現に、ある携帯電話会社のテレビコマーシャルで「スマフォン」という語を耳にしたことがある。しかしこれは定着しなかった。「フォ」の発音は日本人にもできるが、伝統的には「ホ」の方が出やすい。特に「スマフォ」「スマフォン」のように語末に「フォ」や「フォン」が使われると「ホ」との区別がつきにくい。(後略)

「スマートフォン」という外来語から「スマホ」という略語が形成された理由については、日本語音韻論の立場から説明は与えられそうではある。しかし、それは、本稿の目的ではないので、ここでは詳述しない。日本社会に定着にした事物を表す外来語が、原音主義的立場の受容から慣用主義的立場の受容に変化するという本稿の主張の傍証として、②6に引用した山下(2012)を本稿の主張に則した形で説明していきたい。

まず、②6に引用した山下(2012)の「「テレホン」から考えると「スマートホン」になりそうだが、語自体は新語の英語であり「ホ」の慣用が定着しているとは言えず、「フォン」になる」という点に注目したい。これは、smartphoneを日本語化した「スマートフォン」という外来語が日本語語彙体系にはまだ定着していないがゆえに、慣用主義的な立場ではなく、原音主義的な立場で受容されたことを意味する(「ホン」というのは在来音、「フォン」というのは外来語音であるということを、ここで、念のため付記しておく)。

しかし、略語の場合、事情は一転する。原音主義的な「スマートフォン」という外来語から形成される略語は(「スマフォ」ではなく)「スマホ」と在来音を使用した語形になるのである。それはいったいなぜであろうか。②6に引用した山下(2012)には、その理由として、「「フォ」の発音は日本人にもできるが、伝統的には「ホ」の方が出やすい」と述べられているが、ここでは、そもそも、外来語の略語とは、一体どうして形成されるのかという点から考えたい。

この点に関しては、窪蘭晴夫(2002)の以下の記述が参考になる。

②7英語をはじめとする外来語から借用された単語(借用語)は、一般に固有の言葉(大和言葉、和語)よりも長い。このため外来語の中でよく使われる語は、短縮語になりやすいのである。また、短縮される外来語の大半は(中略)二～四モーラの長さになる。

ここで注目したいのは、「よく使われる」外来語から略語が形成されるということ、その略語は2～4モーラの長さになるという2点である。

日本語の語彙体系において、外来語の使用は「延べ語数では約3%どまりであって、量的に見た場合には、日本語の語彙全般にあまり大きな影響を及ぼすほどではないと思われる」³⁵⁾(玉村1984)とされる。つまり、外来語は、日本語語彙体系のなかでは、とはいえないのである。

しかし、窪蘭(2002)によると、「よく使われる」外来語は、2～4モーラの長さに「短縮」されるという。この指摘は非常に示唆的である。というのも、2～4モーラというのは、日本語語彙体系の中核をなす和語、漢語の長さが、およそその範囲に収まるからである(玉村文郎1984などを参照)。この傾向は、外来語において、5モーラ以上の語も一定数観察されるのとは対照的である(これも、玉村1984などを参照)。

つまり、外来語を短縮して略語を形成するということは、よく使われる外国由来の事物(＝外国由来であるものの、日本社会に馴染んでいる事物)を、日本語語彙体系の中核をなす和語や漢語と同等の長さの語に仕立て直す、ということである。さらに言い換えるならば、外来語から略語を形成するということは、語の長さの点において、「擬似和語／漢語」を形成するということである。そのような場合において、和語、漢語では使用されない外来語音を使用すると、「擬似和語／漢語」を形成するという目的は中途半端に終わる。従って、「スマートフォン」から形成される略語は、「スマホ」という慣用主義的なものになると考えられるのである。

以上の議論をまとめるならば、日本語語彙体系に定着しきっていない「スマートフォン」は原音主義的な立場で日本語語彙体系に受容されているが、「よく使われ」、日本語語彙体系の中核をなす(正確には、なしつつある)略語は「スマホ」と慣用主義的な立場で受容されている、となる。

この「スマートフォン」と「スマホ」の関係は、Twitterのカタカナ表記をめぐる²⁵⁾の事情と軌を一にしていると考えられる。つまり、日本社会においてTwitterが定着していない時点では原音主義的な「トゥイッター」という表記も観察されたが、日本社会にTwitterが定着した時点では「ツイッター」という慣用主義的なカタカナ表記の使用が優勢になった、ということである。

なお、本節の最後に、²⁴⁾の④で記した疑問、すなわち、「ツイッター」のヒット件数が爆発的にヒットするようになった2010年以降も、毎年、数件ではあるが、「トゥイッター」がヒットするののかという点に着いて考えたい。

現時点では、この疑問に対しての明確な回答は持ち合わせていない。しかし、(6)の引用部分にあるカッケンブッシュ・大曾(1990)の指摘は、この問題を解決に導くヒントとなる。

カッケンブッシュ・大曾(1990)は、(6)に引用した箇所では、「英語の分かる専門家によってのみ使われたものにはいわゆる「進歩的日本語」の枠組みで処理された場合があると思われる」と述べている。すなわち、「専門家」は、(どのような場合であっても)原音主義的な立場を貫くということを示唆している。

カッケンブッシュ・大曾(1990)が紹介している野球の実況中継も事例は、上述の可能性を裏付ける傍証となろう。カッケンブッシュ・大曾(1990)は、野球の実況中継で、「two strikes」という単語を、「ツー[tsw:]ストライク」(慣用主義的な発音)と発音されているか、「トゥー[tw:]ストライク」(原音主義的な発音)と発音されているか、調べた結果、[tsu:]という慣用主義的な発音が目立ったのは、「スポーツ専門のアナウンサーではなく、野球中継に関してはいわば素人」(カッケンブッシュ・大曾1990)のアナウンサーであった、と指摘している(同時にカッケンブッシュ・大曾1990は、野球の実況中継で、「two strikes」という単語の発音は、「最近ではテレビ・ラジオとも[tu:]の方が圧倒的に[tsu:]より多いようである」とも述べている)³⁶⁾。

カッケンブッシュ・大曾(1990)が言及した例は、「専門家」は、(どのような場合であっても)原音主義的な立場を貫くということを示す一例だろう。

そこで、Twitterを外来語として受容する際の問題を考えたい。ここで注目したいのは、コンピューターゲーム機の製造、販売で有名な任天堂の社長の岩田聡氏が「トゥイッター」と発音しているとする²³⁾の用例(質問投稿日は2013年7月20日)である。岩田氏は「札幌の高校時代から、関数電卓を使ってゲームをプログラム」³⁷⁾を行い、大学卒業後は「クラブ活動の延長のような会社で、スーパープログラマーとしての腕を振る」³⁸⁾い、2002年5月に任天堂の社長に就任した、いわば、コンピューターの「専門家」である。そのような岩田氏が、2013年時点で「トゥイッター」という原音主義的な発音をしているということは、「ツイッター」という慣用主義的な表記が圧倒的に優勢になった2009年以降においても、「トゥイッター」という原音主義的な発音がある種の「専門家発音／表記」として生き延びている可能性がある、ということではないだろうか。すなわち、²⁴⁾の④で述べた事柄、すなわち、「ツイッター」のヒット件数が爆発的にヒットするようになった2010年以降も、毎年、数件ではあるが、「トゥイッター」がヒットするのは、「トゥイッター」という原音主義的なカタカナ表記が、「専門家表記」として命脈を保っている蓋然性を示唆していると考えられる。

5. おわりに

本稿では、Twitterのカタカナ表記は「トゥイッター」か「ツイッター」という問題について、前提となる日本語の外来語表記の諸問題を概観したうえで(2. 節)、「新聞・雑誌記事検索」と「Yahoo! 知恵袋」を利用し、通時的、計量的な調査を行い(3. 節)、その結果をもとに考察、議論を行った。本節では、3. 節で述べた本稿での調査の問題意識((19))に回答する形で、本稿のまとめを行いたい。

本稿での調査の問題意識に対する回答をまとめると、以下のようになる。

②⑧① Twitterが日本に流入した時点におけるカタカナ表記の使用傾向

Twitterが日本に流入した時点(2007年、2008年)での用例が観察できたのは新聞・雑誌記事のみであるが、新聞・雑誌記事での用例を見る限りでは、「トゥイッター」という原音主義的なカタカナ表記と「ツイッター」という慣用主義的な表記が拮抗して使われていた。

②その後、「トゥイッター」という原音主義的なカタカナ表記が衰退していく過程

日本でのTwitterのユーザー数が爆発的に増えた2009年以降、一気に「トゥイッター」という原音主義的なカタカナ表記が衰退していった。これは、Twitterが市民権を得、Twitterを指す単語も日本語語彙体系の中核をなす（なしつつある）ようになったため、「外来語臭」が強い「トゥイッター」が忌避されるようになったと考えられる。

③「トゥイッター」という原音主義的なカタカナ表記（発音）を使用するのはどのような人か

コンピューター関係の専門家は、慣用主義的なカタカナ表記の使用が主流になった2009年以降も、「トゥイッター」を使用し続けている蓋然性がある。これは、外来語受容において、原音主義的な態度をとるのが専門家に多いというカッケンブッシュ・大曾（1990）の指摘には矛盾しない傾向ではある。

本稿の最大の成果は、外来語が指す事物の日本社会における定着度と外来語受容の態度（慣用主義か原音主義か）との相関を見いだせたということにあると考える。しかし、その一方で、本稿で見いだせた傾向、相関は、Twitterという1単語、しかも調査対象資料が新聞・雑誌記事検索と「Yahoo! 知恵袋」という偏った言語資料であること、さらには、②の③で示した蓋然性が任天堂社長の一個人の用例だけに頼っているということ、という点で、おおよそ、一般性に欠けるという点は、重々承知している。この点については、今後、種々の調査を行うことで、一般性を高める考察を行っていきたい。

最後に、Twitter社が正式名称をカタカナ表記にせず、ローマ字表記を採用したことについて、筆者は、「卓見」と評価したい。

石野（1989）には、以下のような記述が存在する。

②9外来語はあくまでも日本語である。原音主義の立場からにしろ、慣用主義の立場からにしろ、それぞれの語が、日本語としての統一語形を持つことが望ましい。語形の統一が得られず、ゆれの状態が続くようだと、片仮名表記をやめて、原語のローマ字表記をそのまま用いる人が増えてくる可能性がある。そうでなくても、現在、ローマ字語が増えつつあるのである。

Twitter社がTwitterの正式名称をローマ字表記にしたのは、日本語としての表記／発音を会社側がトップダウン的に日本語使用社会に「押し付ける」のではなく、日本語使用社会の動向に従い、いわば、ボトムアップ的に会社の日本語としての表記／発音を決定しようとしたようにも、筆者には思えるのである（そのことは、註1で見たように、Twitterの登録商標の「称呼（参考情報）」について、「ツイッター、トゥイッター」、あるいは「ツイッター、ツウイッター」と、慣用主義的な表記と原音主義的な表記の双方が登録されていることから窺えるのではない）。石野（1989）は、日本語の外来語を表記する際に原語のローマ字表記をそのまま採用することに対して、必ずしも肯定的ではないようだが、筆者は、場合によっては、外来語の表記／発音をトップダウン的に指定するカタカナ表記よりも、日本語社会の趨勢に表記／発音を委ねるローマ字表記に、日本語社会の「民主的」な可能性を感じる次第である。

付記

本文中に記載したURLのアクセス日は、すべて2014年6月30日である。

註

1) このことは、Twitter社が提供しているTwitterの「ヘルプページ」(<https://support.twitter.com/>)などを見てもうかがえる（当該ページにおいては、当該サービスを言及する際に、「Twitter」というアルファベット表記以外の表現を見つけることはできない）。また、Twitterの商標登録（第5188811号＝2008年12月12日登録。ならびに、第5469033号＝2012年2月10日登録）の「標準文字商標」も「TWITTER」というアルファベット表記で、カタカナ表記ではない。ただし、登録されている「称呼（参考情報）」は、第5188811号では「ツイッター、トゥイッター」、第5469033号では「ツイッター、ツウイッター」と微妙に異なる。

2) 『現代用語の基礎知識』とは、自由国民社が「1948年の創刊以来、毎年最新の語・時事語・流行語から現代社会を理解するための基礎用語まで、第一線で活躍する専門著者がわかりやすく解説している」「日本で唯一の新語年鑑」である。詳細は、<http://gendaiyogo.jp/about.html>などを参照のこと。

3) 結果として、2013年版と2014年版とのあいだに、記述項目の差異は観察されなかった。表1を見ても分

かる通り、『現代用語の基礎知識』にTwitterが掲載されるようになった2008年版以降、毎年、取り上げられ方に変化があった事実に鑑みると、2013年版と2014年版とのあいだに差異が観察されなかったのは示唆的ではある。つまり、この事実は、2013年から2014年にかけて、Twitterは、日本社会（そして日本語社会）において、「安定的」な地位を獲得した（あるいはしつつある）ことを示唆しているように思えるのである。

4) 日本語における外来語の問題を考える際には、当該外国語がいつ日本語に流入したのかという時期を考える必要がある。日本語への流入時期によって、流入する外国語の種類も異なってくるし、日本語化する方法も異なってくるからである（詳細は、榎垣実1963、石綿敏雄2001などの議論を参照）。本稿において筆者が念頭に置いている外来語とは、現代日本社会において、「放送、新聞、雑誌などのマスメディアのほか、比較的一般の耳目に触れやすい専門書などに登場する外来語で、外来語辞典や新語辞典に収録される可能性の強いもの」（石野博史1989）としておきたい。

5) カタカナは日本語音韻体系で発音できる音を表す表音文字である。ただし、カタカナで表記されるものであっても、日本語として発音が困難なものも存在する場合も事実である（註18でも触れる、石野博史1989、1991の議論などを参照）。

6) 外来語のゆれには、厳密には「表記のゆれ」と「発音のゆれ」が観察される。このことについては、2. 3. 節の議論を参照のこと。

7) 本稿で取り上げた諸文献にはもちろん、それ以外の概説文献にも取り上げられている。

8) 引用文中の母音/u/の発音記号が〔u〕ではなく〔u〕となっているのは、原文のママである。筆者は、現代日本語の母音/u/は円唇性がないため、現代日本語の母音/u/を記述する際には〔u〕という記号を採用しているが、引用文中の表記については、原文を尊重している。

9) Bloch, B. (1950) 'Studies in Colloquial Japanese IV-. Phonemics' *Language* Vol.26のこと。

10) なお、カッケンブッシュ・大曾（1990）が言及する「-チック」と「-ティック」のゆれの問題については、最近、以下のような報告があったことを付記しておく。

・村中淑子（2012）

外来語の一部をなすものとしては、「チック」と「ティック」という表記・音声両面にわたる2種のバリエーションがあるが（ロマンチック／ロマンティック、ドラマチック／ドラマティック、オートマチック／オートマテックなど）、日本語の中で新たなことばを作り出す、すなわち造語力を持つ成分としては、「チック」の形だけである（おとめチック／×おとめティック、漫画チック／×漫画ティック、おばさんチック／×おばさんティック、など）。

・荻野綱男（2013。荻野綱男2014に当該論文を書き直したものが掲載されている）

古く入った外来語は「-チック」、新しく入った外来語には「-ティック」がつく傾向がある。

古＝「-チック」、新＝「-ティック」の傾向性の例外もあるが、それぞれ説明は可能である。

11) 「思われる」という文言を括弧付きで付加したのは、この基準を知らない日本語使用者も多いと想定できるからである。公文書の作成にかかわる公務員や、教育関係者、マスコミ関係者以外は、実はこの基準の存在すら知らないのではないか。

12) 次節で論じる通り、外来語の発音と表記は厳密には分けて考えなければならない問題であるが、両者は重なる部分も多いため（特に在来音に関して）、ここではあえて『外来語の表記』という表記の基準に基づいて在来音と外来語音という発音の問題について考えていくことにする。

13) 『外来語の表記』の「付」は以下のとおり。

前書きの4で過去に行われた表記のことについて述べたが、例えば明治以来の文芸作品等においては、下記のような仮名表記も行われている。

キ：スキフトの「ガリワ」旅行記 エ：エルテル ヲ：ヲルポール

ワ：ワイオリン ㊦：㊦オロン エ：エルレエヌ ヲ：ヲルガ

ヂ：ケンブリッジ ズ：ワーズワース

14) 文部大臣に対する第18期国語審議会の答申『外来語の表記』を受けて、『外来語の表記』が告示された。ただし、内閣告示の『外来語の表記』には、第18期国語審議会の答申の『外来語の表記』にあった「前文」は存在しない（以上、『日本語学』第10巻第7号に掲載された「【資料】内閣告示『外来語の表記』」に対す

る編集部の解説に拠る)。

なお、(9)に引用した武部(1991)の下線部の表現が出てくる第18期国語審議会の答申『外来語の表記』の「前文」(http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19910207001/t19910207001.html)の該当箇所も、参考までに、以下、紹介しておく(以下の引用文中の下線部が、武部1991とはほぼ同様の表現の箇所)。

「外来語の表記」を検討するに当たっては、仮名を音との対応において用いるという考え方に立つとともに、慣用を尊重することを基本的な方針とした。そして、どのようなものが外来音として国語の中に取り入れられているかを事例に即して検討した結果、在来の国語の音のほかに、(1)言い分け聞き分けの上で余り無理がなく、外来音として国語の中に入っていると考えられるものに対応する仮名、(2)言い分け聞き分けの上では十分安定していないが、外来音としてある程度国語の中に入っていると考えられるものに対応する仮名を取り上げることにした。

15) すなわち、『外来語の表記』の「第2表」にあげられたカナは、日本語音韻体系の周辺に位置づけられる音が多い、ということである。そのため、日本語母語話者にとっては、発音、ならびに聞き取りが困難な音も多く含まれる。それゆえ、「第2表」にあげられたカナを、以下のように、音を表すものではないと評する見解も存在することを付記しておく(石野1991。傍点は筆者)。

筆者に言わせれば、第二表に含まれる仮名の多くは、実際には、表音のためではなく、表語、すなわち、ある語を別のある語から区別して書き表すために用いられるのである。その意味では、第二表は発音と表記との一致を否定するところに成り立っていると言ってもよいと思う。

16) 『NHK放送ことばハンドブック』(1987年、日本放送協会)のこと。

17) 2005年に出版された『NHK放送ことばハンドブック 第2版』には、「スポーツ中継などでは、「チーム」を「ティーム」と発音してもよい」という注記になっている。ただし、「ティーム」という表記は、第2版においても認められていない。

18) ここで取り上げた例は、カタカナ表記をどのように発音しているかという「表記→発音」という方向の問題であったが、実は「発音→表記」という方向の問題、つまり、ある音をどのようにカタカナ表記するかという問題も存在する。本稿で問題となる[tw]という発音も、どのようなカナを用いて表記するかという問題が存在するようである。[tw]という発音は、「トゥ」というカタカナを用いる場合が大多数のようであるが、たとえば、小泉保(1991)には「テウ /tū/はまだ定着していない」(傍点は筆者)という一節がある。その一方で、小泉(1991)の別の箇所には「デュ [du]はトゥ [tu]同様いまだなじめない」(傍点は筆者)と書かれている箇所もあり、小泉氏が[tw]という発音に対し「テウ」というカタカナを当てる立場なのか、「トゥ」というカタカナを当てる立場なのか、判然としない。

さらに、石野(1989, 1991)には、表記から発音が想定できない「表記→発音不能」という例も紹介されていることを付記しておく(石野1989, 1991は、「ジョリイ」「チョエ」「フロップイ」「ボー・エイル」「オニツチャ」「クワキットル」「ボルバンナドイル」の下線部のような例をあげている)。

19) 慣用主義表記は日本語の音韻体系に根付いた慣用音を利用した表記であり、「少なくとも日本語の音韻として認められるほどのものは、表記上も区別されていると見てよい」(石野1989)と考えられるからである。

20) このことは、『外来語の表記』の「留意事項その2(細則的な事項)」の「Ⅱ 第2表に示す仮名に関するもの」の「6 「トゥ」「ドゥ」は、外来音トゥ、ドゥに対応する仮名である。」の注記に、「注 一般的には、「ツ」「ズ」又は「ト」「ド」と書くことができる。」とあることから理解できる(つまり、『外来語の表記』は、一般的には慣用音である「ツ」というカナを使うが、原音を尊重、重視する際には「トゥ」というカナを使う、という立場である)。

21) 井上(2002)によると、第二次世界大戦中から、語末の長音を表記しない動きがあり、「学術用語を定めるときに、機械工学、航空工学などの工学系では、戦前から「四文字以上で語尾が長音のものはこれを省略する」という原則を続けている」(井上2002)とのことである。また、JIS(日本工業規格)の用語も、語末の長音を省略する。一方で、井上(2002)によると、理系分野であっても、数学、天文学、化学、建築学などの理系分野は長音表記を使用するという。このように、現代日本語の外来語における語末の長音の表記の問題は、慣用主義か原音主義かの問題というよりも、学問分野の問題になっている側面も大きい。

なお、語末の長音については、井上(2002)は、2.4.節の⑬の小椋(2013)の指摘と同様、長音表記

がない場合でも、実際は長音があるように発音されることがあることを指摘している。カタカナ表記と発音は、厳密には別の問題であることを、ここで、改めて確認しておきたい。また、語末の長音の存在が不安定なのは、音声学的に説明することが可能であるが、本稿とは直接関係しないので、説明は省略する。ご関心のある方は、前川喜久雄（2002）などの議論を参照されたい。

22) いくつか存在する日本語用のインターネット検索エンジンの中からここでgoo検索を利用したのは、種々の検索エンジンについて検索性の安定性を検討した結果、「日本語の検索エンジンとしては、2012年2月のところ、gooが一番よいと判断する」（荻野2014）という指摘があるためである（ただし、荻野2014の指摘は、引用文中にある通り2012年2月時点での判断であるため、本稿執筆時＝2014年6月では、事情が変わっている可能性も否定はできない）。

23) 今回、筆者が@niftyを利用したのは、たまたま筆者が@niftyの会員だったという理由だけで、他意はない。全く同様のサービスが@nifty以外も提供されていることは、岡田（2014）でも説明したとおりである。

24) なお、今回の調査にあたって、新聞社、通信社の以下の表記基準を参照したが、どれも異口同音に「原音で「トゥ、ドゥ」の音は、「ト、ド」または「ツ、ズ」で表す」とあり、具体例が幾つか紹介されているだけで、「Twitter」をどのようにカタカナ表記するかについては、判然としなかった。

- ・NHK放送文化研究所〔編〕（2005）『NHK ことばのハンドブック 第2版』日本放送出版協会
- ・読売新聞社〔編著〕（2014）『読売新聞用字用語の手引 第4版』読売新聞社
- ・朝日新聞社用語幹事〔編〕（2010）『朝日新聞の用語の手引』朝日新聞出版
- ・毎日新聞社〔編〕（2007）『【改訂新版】毎日新聞 用語集』毎日新聞社
- ・共同通信社〔編著〕（2010）『記者ハンドブック 第12版 新聞用字用語集』共同通信社
- ・時事通信社〔編〕（2010）『最新 用字用語ブック [第6版]』時事通信社

25) 新聞・雑誌記事の執筆者でなくとも、表記や単語使用に種々の基準の影響を受けている可能性は、重々承知している（「常用漢字」や「現代仮名遣い」といった各種内閣告示はもちろん、コンピューターの漢字変換辞書も、表記の「基準」と言えなくはないだろう）。しかし、新聞・雑誌の記事の執筆者よりは、基準にとらわれる力が弱いと思われる。そのような事情を念頭に置いたため、「相対的に少ないと思われる」と表現した次第である。

26) 詳細は、前川喜久雄・山崎 誠（2009）や、http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/を参照。

27) 詳細は、前川喜久雄（2008）や、http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/を参照。

28) 「連載小説、寄稿、図表等が紙面の多くを占める記事を除いた」（小磯ほか2009）とのことである。

29) 「1980～2005年の会議」のうち、「原稿を単純に読み上げる会議をできるため避けるため、原稿読み上げ率の高いとされる本会議、短い会議・委員会（500文以下）を除外してサンプルを選定した」（小磯ほか2009）とのことである。

30) 1. 節の表1で確認したとおり、Twitterが日本社会に定着し始めた2008年版、2009年版の『現代用語の基礎知識』には、「トゥイッター」というカタカナ表記も観察されている。『現代用語の基礎知識』に収録されるということは、「トゥイッター」という表記も、2008年度版、2009年度版が発行される時期には、日本語社会において、一定程度、使用されていたと考えられる。

31) 当該表記を書き手自身が使用しているのではなく、その表記に言及して解説したり考察したりしている場合、もしくは、書き手以外が使用したケースについて引用している場合である。この件については、岡田（2014）での議論も参照。なお、荻野（2014）は、前者の場合を「参照例」、後者の場合を「引用例」と、区別している。

32) ただし、3. 3. 節で触れたとおり、石綿（2001）は「英語でうしろにWのある時に比較的安定して」トゥが現れると指摘している。この指摘を踏まえると、Twitterが日本にもたらされた当初は「トゥイッター」というカタカナ表記が大多数を占めるべきだとも思われるが、表2を見ても分かるように、実際はそうではない（表2からわかるとおり、Twitterが日本にもたらされた頃である2007年、2008年において、「トゥイッター」と表記される確率は、せいぜい40%強である）。

33) 和語、漢語が日本語の語彙体系において中核をなすといえる理由については、玉村文郎（1984）の以下の記述を参照も参照されたい。

和語は当然のことながら日本語の語彙の根幹をなしていて、漢語・外来語に比して、使用範囲も広く使用度数も高い。しかし、(中略)本来、日本語の語彙の根幹であるはずの和語が、異なり語数では漢語に首位をゆずって第2位になっており、(中略)こうして、日本語の語彙を量的に見た場合には、漢語は実に大きな勢力になり、和語は質を考えない限り第2位に落ち込んでいて、日本語の語彙・語種的構造の一大特徴となっている。

34) もちろん、音素配列則 (phonotactics。当該言語において、組み合わせが可能な音素のあり方のこと。詳細は、亀井孝ほか〔編著〕1996の「音素配列論」の項を参照)は、和語とも漢語とも異なる。外来語における音素配列則についての詳細は、玉村(1984)や松崎寛(1994)が参考になるが、ここで大切なことは、外来語を受容する際の態度が慣用主義であろうが原音主義であろうが、外来語の音素配列則は基本的にはその両者に違いはない、ということである。慣用主義と原音主義の違いは、音素配列則の問題ではなく、外来語の語形を構成する要素にどのような音を採用するか、という点である。

35) これは、国立国語研究所が1956年に発行された雑誌を対象に行なった「現代雑誌九十種の用字用語調査」の調査結果をもとにしており、2014年現在においては事情が異なる可能性もあることを付記しておく。

36) 引用文中の母音の音声記号が[u]となっている事情については、註8を参照されたい。

37) 朝日新聞2011年7月28日付夕刊「ニッポン人脈記 私の中のアキバ2 「トキワ荘」胸に刻んで」より。

38) 朝日新聞2004年6月19日付朝刊 (be週末b1)「任天堂社長 岩田聡さん (フロントランナー)」より。

参考文献

- 石野博史 (1989)「外来語」玉村文郎〔編〕『講座日本語と日本語教育6 日本語の語彙・意味 (上)』明治書院
- 石野博史 (1991)「表音と表語—外来語・外国語の発音と表記—」『日本語学』第10巻第7号
- 石綿敏雄 (2001)『外来語の総合的研究』東京堂出版
- 井上史雄 (2002)「西洋語の発音の影響」飛田良文・佐藤武義〔編〕『現代日本語講座 第3巻 発音』明治書院
- 楳垣 実 (1963)『日本外来語の研究』研究社
- 遠藤織枝 (1989)「外来語の表記」武部良明〔編〕『講座日本語と日本語教育8 日本語の文字・表記 (上)』明治書院
- 大月宇美 (2014)「インターネット」『現代用語の基礎知識』自由国民社
- 岡田祥平 (2014)「インターネットを利用した新語・流行語研究の可能性—「Twitter」の蔑称の拡散過程の検証を例として—」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第6巻第2号
- 岡田祥平 (印刷中)「「アメリカンフットボール」の略称は「アメフト」か「アメフット」か—音韻論的考察と新聞・雑誌記事における実態の検討—」『新大國語』
- 荻野綱男 (2013)「外来語の語形のゆれ—チックとティッカー—」『計量国語学』29巻1号
- 荻野綱男 (2014)『ウェブ検索による日本語研究』朝倉書店
- 小椋秀樹 (2013)「大規模コーパスを活用した外来語表記のゆれの調査」『立命館文学』630
- カッケンブッシュ寛子・大曾美恵子 (1990)『日本語教育指導参考書16 外来語の形成とその教育』大蔵省印刷局
- 亀井 孝・河野六郎・千野栄一〔編著〕(1996)『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂
- 神田敏晶 (2009)『Twitter革命』ソフトバンククリエイティブ
- 窪田晴夫 (1999)『現代言語学入門2 日本語の音声』岩波書店
- 窪田晴夫 (2002)『くもっと知りたい!日本語』新語はこうして作られる』岩波書店
- 小磯花絵・小木曾智信・小椋秀樹・宮内佐夜香 (2009)「コーパスに基づく多様なジャンルの文体比較—短単位情報に着目して—」『コーパスに基づく多様なジャンルの文体比較—短単位情報に着目して—』(http://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2009/pdf_dir/P2-32.pdfにて閲覧可能)
- 小泉 保 (1991)「現代日本語の音韻体系と正書法」『日本語学』第10巻第7号
- 塩田雄大 (2012)「放送の外来語—傾向と対策—」陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫〔編〕『外来語研究の新展

開』おうふう

関根健一 (2012) 「新聞の外来語はどのように生まれるか」 陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫 [編] 『外来語研究の新展開』 おうふう

武部良明 (1991) 「内閣告示『外来語の表記』の考え方」 『日本語学』 第10巻第7号

玉村文郎 (1984) 『日本語教育指導参考書12 語彙の研究と教育 (上)』 大蔵省印刷局

津田大介 (2009) 『Twitter社会論 新たなりアルタイム・ウェブの潮流』 洋泉社

前川喜久雄 (2002) 「話し言葉における長母音の短呼—『日本語話し言葉コーパス』を用いた音声変異の分析—」 『国語学会2002年度春季大会要旨集』

前川喜久雄 (2008) 「『日本語話し言葉コーパス』の設計と実装」 『日本語学』 第27巻第5号

前川喜久雄・山崎誠 (2009) 「『現仏・日本語書き言葉均衡コーパス』」 『国文学解釈と鑑賞』 第74巻1号

松崎 寛 (1993) 「和語・漢語・外来語の語形と特殊拍の音配列上の制約 —『分類語彙表』 3万1千語を対象として—」 『東北大学文学部日本語学科論集』 第4号

村中淑子 (2012) 「外来語由来の接尾辞「チック」と類義語との比較」 『第1回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 (http://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop_no1_papers/JCLWorkshop2012_09.pdfにて閲覧可能)

山下洋子 (2012) 「「スマートフォン」と「スマホ」」 『放送研究と調査』 11月号